

子どものヘルスケア施設における案内支援システムに関する研究
—療育施設の子どもの向け情報提供のための絵本作成—

Study on Inquiry Support System in Children's Healthcare Facilities

Picture Book for Children as an informer in a Designated Treatment Education Institution

5. 建築計画 - 2. 施設計画 - j. 病院 (外来他)
案内支援システム ヒーリング 絵本
支援的デザイン 療育センター

正会員 ○ 古川 恵里 1* Eri Furukawa
同 毛利 志保 2** Shiho Mori
同 加藤 彰一 3*** Akikazu Kato

Abstract

This paper discusses the potential of picture books to be used in the preparation of children patients. Picture books with impressive of pictures, stories, and wordings would greatly benefit children's emotional stability when used in adequate contents and timing. The paper presents some actual cases of impressive picture books on hospitals. However, some pictures follow socially coded scenes in the health-care environment, those of which are now rectified by recent innovations in the health-care facility planning, design and management field. Through the idea of childcare project and picture book effects, this paper shows the process of working on a picture book as an informer for children in a particular healthcare facility.

背景・目的

医療技術の高度化、専門化に伴い病院建築の物理的環境はハードなものとなり、利用者の心理的負担を増やした。1990年代からヘルスケア施設で患者や訪問者、スタッフが感じるストレスを緩和し、医療行為の補助・治療促進を目指し、デザイン・環境で心理的にサポートする支援的デザインの重要性が数多く取り上げられてきた。

子どもの生活における「遊び」の役割を再認識する必要性や、絵本をコミュニケーション手段やメディアとして位置づける絵本学を注目している。「病院の絵本」研究を通じアートの導入方法に関心を抱いており、ウェイファインディングや治療等の説明への展開も考えられる。心理的支援は治療の促進、生活の質の向上を期待できる。

本稿では、チャイルドライフの観点から子どものヘルスケア施設における案内支援としての絵本のニーズを明らかにし、絵本の表現手法を整理することにより、実際に案内支援用の絵本制作に活かすことを目的としている。

チャイルドライフ・プログラム(CLP)

R.H. Thompson, G. Stanford^{x1}によるCLPの目的は、

- (1)子どもが入院・治療に伴う不安、ストレスに対処できるように援助する。
- (2)子どもの年齢相応の発達を援助する。

子どもの理解力や適応力を信じるのがチャイルドライフの思想である。小児医療において検査内容を子どもに隠し、嘘をつくことは、子どもの心を傷つけ、信頼感を損なうトラウマへの発展が懸念される。

■チャイルドライフスペシャリスト(CLS)の役割

CLSが行う遊びは、単なるコミュニケーション手段としての遊びではなく、子どもの心を癒す治療的な遊びにより、子どもは十分に心を開放させるものである。

□子どものニーズを知る：実際に会った時の印象(主観的見解)とカルテの記載事項等(客観的見解)をもとにそれぞれの子どものニーズを明らかにし、援助計画を立てる。
□遊びの援助：子どもにとって遊びを「不安やストレスを軽減する遊び」「発達を促進する遊び」「自立性を育む遊び」「自己治療的な遊び」と位置づける。

□プリパレクション(Psychological Preparation)：病院において子どもが検査や手術に臨む際、心の準備をして臨めるよう援助する。インフォームド・コンセントとは異なり、不安な気持ちや疑問点を引き出すことを目的とする。
□兄弟姉妹への精神的サポート：Family-centered careに則って患児同様ストレスを抱える家族の心のケアを行う。

以上の4項目はCLSの主な役割である。本稿では特にプリパレクション・ツールとしての絵本に着目している。

■案内支援パンフレットとしての絵本のニーズ

建築的観点における利用者の案内支援システムとして、来訪する際の施設案内に、どのようにCLSの役割を担わせるかが重要である。昨今、小児看護学会においてプリパレクションとして絵本を用いるケースが報告されている。親子が同時に病気等の情報を得ることで、不安の軽減に繋がる。東北大学病院の独自の子ども向け入院案内パンフレットは3歳から小学生までに配布される。

前者は主に医療行為について、後者は主に院内の設備や活動内容を説明するものである。子どもの施設では子ども向けの情報提供をすることで、「何をされるのかわからない」不安が減り、スムーズに処置を行えると考える。

*三重大学大学院工学研究科 博士前期課程

**三重大学大学院工学研究科 助教 工博

***三重大学大学院工学研究科 教授 工博

*Graduate student, Graduate School of Eng., Mie Univ.

** Assistant Prof., Graduate School of Eng., Mie Univ., Dr. Eng.

*** Prof., Graduate School of Eng., Mie Univ., Dr. Eng.

絵本の効果と、物語性の施設デザインへの反映

■絵の表現方法

子ども向けの情報提供手段として絵本を捉えるにあたり、笹本ら³における「絵本の方法—絵本表現の仕組み—」による分類と、藤本⁴による分類を取り上げ、絵本の構成の主な項目を抽出した。(表1)画面展開(部分)の分類に関して、笹本ら³が画面ごとの分類を行うのに対し、藤本⁴はページターナーと次画面の関係性について型をつくり分類している。全体として、笹本ら³の分類では視覚表現の手法を分類しており、藤本⁴は絵本の構成、ページの機能等に重点を置いた分類である。

本稿で紹介する絵本制作過程での絵本学研究として、各項目で詳細な分類を優先に参考とした。

表1 絵の表現方法に関する分類の比較

	笹本ら(文3)	藤本(文4)	型・代表作
絵とことばの関係性	「重複」	「協力」	『ガンビーさんのドライブ』 ^{3*} 『紙しばい屋さん』 ^{4*}
	「分担」	「相反」	『おおかみと七ひきのこやぎ』 ^{3*} 『ひとまねごころとぎらいぼうし』 ^{4*}
画面の方向性	「順勝手」	「絵の流れ」	『ミッフィーとメラニー』 ^{3*} 『どろんこハリー』 ^{4*}
	「逆勝手」	「絵の逆方向の流れ」	『おおきなかぶ』 ^{3*} 『ハッカバクサー家の物語』 ^{4*}
画面展開(部分)	「引き」: 読者にページをめくって次画面をみたいという欲求を抱かせるような画面の作用	「ページターナー」: めくる欲求をおこさせるもの、しかけ	A 『アンガスとあひる』 ^{4*}
		掛け合い型	A→B 『三ひきのやぎのがらがらどん』 ^{4*}
		問答型	C→B 『どうぶつのおくりとりえほん』 ^{4*}
		同一謎一答型	A→C→B 『やさしいおなか』 ^{4*}
		積み重ね型	A→B→B'→B" 『きんぎょがこけた』 ^{4*}
		B	
画面展開(全体)	「受け」: 前画面からの読者の期待に応じたこれを引き受ける 「止め」: 読者をその画面に見入らせ釘づけにして画面展開を停止させるような作用	「ページターナー」の次画面に相当する	『あしたは月よう日』 ^{3*}
		「同一謎一答型」に相当する	C 『あしたは月よう日』 ^{3*}
視点	「反復」: 類似又は同一の画面を何度かくり返す 「照応」: 時間軸に沿った展開を越えた表現内容に対し、空間的な構造物の連続性として一体感をもたせる		A→B→A'→B' 『ガンビーおじさんのふなあそび』 ^{3*}
			A→...→A' 『かいじゅうのうろこ』 ^{3*}
視点	固定視点		『ちいさいおうち』 ^{3*}
	やや引いた視点		『たまご』 ^{3*}
	俯瞰の構図		『さむがらやのサンタ』 ^{3*}
	視点の切り替え		『14ひきのおつきみ』 ^{3*}

■発達支援の絵本

絵本は医療行為等の紹介に留まらず、子どもに対する効果的な情報伝達手法として、療育・リハビリテーションの観点からも期待されている。近年、発達障害がある子ども向けの読み聞かせにふさわしい絵本が紹介されている。発達支援としてみた絵本の効果は、反応を促進する、語彙を増やす、想像力をつける、からだを動かす、自信をつける、計算や挨拶、集団生活の練習があげられる。ストーリー展開の早さが理解度の低下へ繋がるため、繰り返しの多い絵本が好まれ、聞く力を育てると考えられる。絵本の表現方法でいう「引き」「受け」の「反復」がこれにあたる。(図1)読み聞かせをする上で、七五調等のリズム感を楽しみながら読み聞かせる要因となる。

■施設デザインと物語性

ここでは施設デザインに物語を反映している事例を報告する。施設独自の物語は情報提供をする上で様々な展開が考えられ、案内支援として多くの展開が期待できる。□あいち小児保健医療総合センター(図2,3,註2)

施設を物語の設定とした「どんぐりくんとマロンちゃん」という物語をホームページ上で絵本形式に公開しており、同様の絵を施設内インテリアデザインに展開している。その他の仕掛けとして浮き出た小さな陶器の動物の群れの表現は触りたくなる仕掛けで、感覚を刺激するのに役立つ。また、絵を四分割したタイルの組合せはクイズ感覚で楽しむことができる。

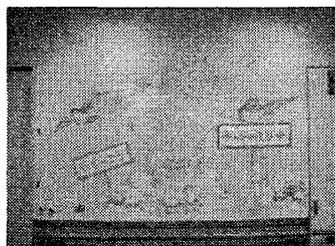


図2 施設デザイン

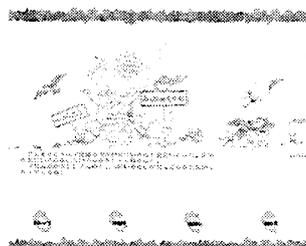


図3 図2のもととなった描写

□サンディエゴ子ども病院(図4,5 註3)

実在した入院患児の空想の世界から発展した「カーリーと魔法のガーデン」の物語はホームページ上に公開されている。登場する動物のブロンズ像や情景を表現したヒーリングガーデンに設置されている。



図4 施設デザイン



図5 図4のもととなった絵本



図1 「反復」の例 「いないいないばあ」

子ども向け案内支援のための絵本制作プロジェクト

■絵本制作の意義

子ども向けのわかりやすい案内支援のため、医療行為だけでなく施設の印象を含めた全体の印象を伝えることで、空間と活動をイメージしやすく効果的なプリパレクションとなり得る。また家族やスタッフが子どもに対し説明する際にもわかりやすい情報提供が可能となる。

■施設概要 豊橋市こども発達センター^{註1}

当センターは、「保健・医療・福祉」の拠点として豊橋市保健所・保健センターと併設し2009年4月に設置された。保健センターと連携を図り、発育の段階における障害等の早期発見、適切な支援を行う療育システムの中心的役割を果たす為各部門に分かれてサービスを提供する。

■絵本の対象施設の選定理由

対象施設となる豊橋市こども発達センターは、施設の内観を示すパースを含めた施設案内ホームページが開設されているがリハビリに関して、子ども向けの案内ページはまだ開設されていない。リハビリ前のプリパレクションは、発達障害の子どもにとっても一日の活動を説明する上で有効である。様々なリハビリが存在する中、リハビリの一部が伝わるだけでも、警戒心は軽減されるだろう。さらに絵本と実際の施設の対応を理解できると空間認知の訓練としても効果的である。

本稿で取り上げるこども病院を特に参考に子どもの福祉施設における案内支援の手法を提案したい。

■リハビリ諸室の施設デザイン

アーティストによって提案されたインテリアのアートワークは、壁面に描かれた動物を探しに冒険する物語を来訪者が自ら創るというものである。所々、案内役のコトリが登場する。診療室では、望遠鏡で覗いた世界を表現し、動物の体の一部を示し、どの動物かを当てさせるクイズ形式となっている。リハビリ諸室では、療法ごとに扉の色が異なり、それぞれの室を区別するサインとして一室ずつ異なる種類の動物のキャラクターが描かれている。通園諸室は花の名前がサインとなり、諸室はそれぞれイメージカラーで分けられている。壁面の連続する凹凸の丸型アートは触りたくなる仕掛けのひとつである。

■絵本の設置場所

主な設置場所のプレイルーム(PR)は一日約30組が療育前後に30分程度の利用がある。遊び空間に絵本を設置する事で無理なく自然に興味を持たせる事が可能となる。PRは、子どもが遊びに没頭したとき、自分で自分を癒す貴重な空間でもあり、設置場所として適している。

表3 リハビリ諸室の施設デザイン

リハビリ諸室	療法	扉に描かれた動物	扉の色
理学・作業療法室	理学療法:運動発に心配のある子どもに対し、動作の発達を促す支援を行う 作業療法:手先が器用な子どもや、遊びが広がらず行動面に心配のある	キツネ、タヌキ、ヤキ、ワマ、クマ	黄緑
感覚運動療法室		サル	薄オレンジ
言語療法室	言語訓練療法:聞こえやことばの心配のある子どもに対し、ことばやコミュニケーション・社会性の発達を促す支援を行う	リス、イヌ、フタ、パシ、ヒツジ等	薄紫
集団療法室		ゾウ、ライオン	オレンジ
通園	3歳までの発達が心配のある子どもが母子で通い、楽しい集団生活を通して、成長・発達を促すとともに、保護者への育児支援を行う	ゆり、ばら、すみれ、ひまわり	ピンク、水色、薄紫、オレンジ

表4 絵本の設置場所

設置場所	プレイルーム、各プレイコーナー(7箇所)
空間の利用時期	療育前後、待合時間
空間の利用目的	スムーズに療育もしくは帰宅できるように心を落ち着かせる空間
絵本の効果	リハビリ・施設利用に関するプリパレクション効果、待合時間の親子きょうだいのコミュニケーションツールとしての効果

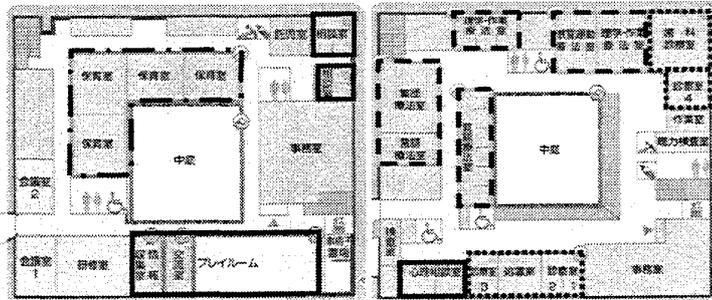


図6 1階平面図

2階平面図

部門別ゾーニング ① ——— ② ③ - - - ④ - - -

表2 諸室の概要と機能フロー

諸室	総合案内、相談室、待合ロビー	プレイルーム	診療室、処置室、検査室	リハビリ室	外来グループ療育
スタッフ	ソーシャルワーカー、保健師、臨床心理士	保育士	児童精神医師、小児科医師、看護師等	PT,OT,ST,OP(※)	保育士等
活動内容	相談、助言、指導	療育前後休憩、相談	地域療育サービス	リハビリテーション	訓練、観察、評価
写真					

機能フロー

① 相談部門

② 医療部門 (診療)

③ 医療部門 (リハビリ)

④ 通園事業部門

※ PT(Physical Therapist)理学療法士、OT(Occupational Therapist)作業療法士、ST(Speech-Language-Hearing Therapist)言語聴覚士、OP(Clinical Psychologist)臨床心理士

■物語の構成

物語では、アーティストにより描かれた各室の動物を主な登場キャラクターとしているが、物語の構成は本研究チームと三重大学美術部の共同で発展させた。全体は三部構成で、案内役のコトリが子どもの成長に不安を抱える親子の相談を受け、リハビリまで連れていく流れ。物語で伝えたいことは、「人はそれぞれ得手・不得手があるけれど、お互い支えあって、皆で仲良くしていこう。」

□第一部

コトリがプレイルームや相談室で動物の親子と出会う。待合空間には複雑な顔をした親が子を見守っている描写があり、次の画面でコトリは一組ずつ親子を誘導する。

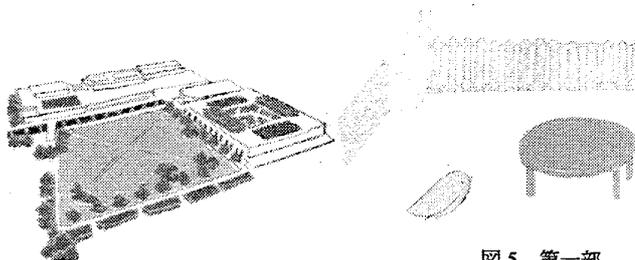


図5 第一部

□第二部

コトリは一組ずつ親子に心配事を聞き、各リハビリ室へ誘導し、活動内容を説明する。第二部では、様々なリハビリ療法を確認する上で有用だと考え、「引き」と「受け」の「反復」手法を用いる。

□第三部

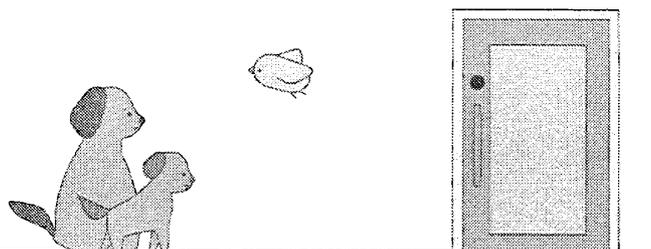
コトリは最後に残った動物の親子を通園教室へ誘導する。親子が集まり、集団生活を経験し、仲間を増やす。「また遊ぼう」という終わり方で通園の雰囲気伝える。

■制作過程における課題

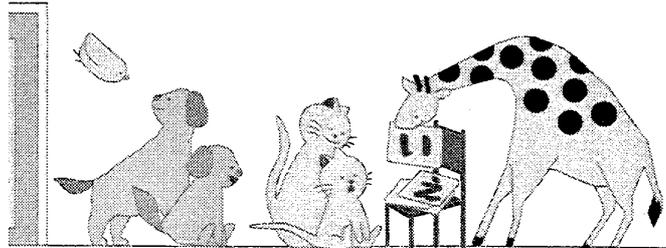
今回、福祉施設の案内用絵本の制作にあたり、最初の課題は単なる施設紹介の絵本ではなく、楽しい絵本かつメッセージ性のある絵本にすることだった。しかし、リハビリの内容をどのように伝えるか、反復やリズムのあることばを組み込み方、スムーズな物語構成が議論的となった。今後の課題は、絵本の製本に向けて文字の挿入や写真を掲載した施設の紹介ページの構成である。

まとめ

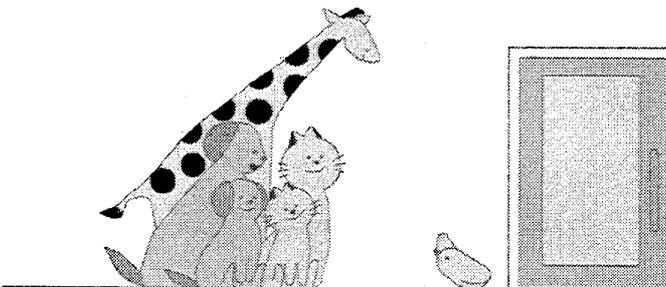
今後は本稿では、子どものヘルスケア施設における子どもへの情報提供の必要性とその効果的手段として絵本のニーズが明らかとなった。本稿で取り上げた絵本の表現方法等を参考とし、絵本を制作し、設置する際には前後調査を行い、案内用絵本の使われ方を確認する予定である。初めて診療に来訪する親には、親が事前に施設の写真を撮影し、子に流れを説明する親子もいるときく。今回制作する絵本が彼らの手助けとなれば嬉しい。



①子の成長の心配した親と子が相談にやってくる



②リハビリ中の他の親子を見て説明を受ける



③誘導してくれたコトリにお礼をいい、リハビリをする

図6 第二部 「反復」手法

註1 豊橋市HP <http://www.city.toyohashi.aichi.jp/index.html>

註2 あいち小児HP: <http://www.wachmc.pref.aichi.jp/>

註3 Children's Hospital and Health Center, HP: <http://www.chsrd.org/>

参考文献

文1) R.H.トムソン,Gスタンフォード著,小林登監修,野村みどり監訳,堀正訳,病院におけるチャイルドライフ,子どもの心を支える「遊び」プログラム,中央法規2000.09

文2) 藤井あけみ,チャイルド・ライフの世界,子どもが主役の医療を求めて,新誠出版社2000.12

文3) 中川素子,今井良朗,笹本純,絵本の視覚表現,そのひろがりとはたらき,日本エディタースクール出版部2001.12

文4) 藤本朝巳,絵本のしぐみを考える,日本エディタースクール出版部2007.10

文5) 山田咲樹子,健康障害をもつ子どものきょうだいへの看護アプローチ,絵本による説明への反応から,東京女子医科大学病院,日本小児看護学会2009

文6) 伊藤山樹ら,小児看護におけるアプリオリ・インテグレーション・ツールの開発,デザイン学研究2008

文7) 大池真樹,手術に伴う短期入院中の体験に対する幼児の理解,幼児と母親に絵本によるオリエンテーションを実施して,日本小児看護学会誌2006

文8) 谷地ミヨ子,近藤育代,絵本で楽しく発達支援,子どもを育てる読みきかせ,三洋社2007.5